

説教「神の義と社会の正義」

ホセア一・五〜七

ローマ 三・一九〜二四

牧師 森田恭一郎

神は愛である。ホセア書一章の初めの箇所でも、まだ幼かったイスラエルを私は愛した。そこから始まっています。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。エフライムの腕を支えて歩くことを教えたのは、私だ。私は人間の綱、愛の絆で彼らを導き、彼らの頸から轡を取り去り、身をかがめて食べさせた(ホセア一・一〜)。ここを読むだけでも、神の愛を切々と語りかけているのが伝わって来ます。今日は神の愛から生じる神様の正義、神の義義しさ、神の義に思いを向けます。

今日のローマ書は神の義を語ります。律法を実行することによって、誰一人神の前で義とされないからです。ところが今や、神の義が示されました。イエス・キリストを信じるにより、信じる者すべてに与えられる神の義です(ローマ三・二二〜二三)。律法は人が正しく生きるための規則のようなものです。しかし律法を守って善を行う者は一人もいない(ローマ三・一二)、神様の前で、私は善人です、正しい人です、義人です、と言い切れる人はいません。だから通常の筋道から言えば、皆、裁かれるしかない。でもそれは通常の義です。病院のベッドで、時折、こう言われる患者さんがいます。「私は善い事は出来てないから極楽には行けないでしょうね」。あるいは、「死ぬのが怖い」と、実際に思う方もいます。善い

ことをことをすれば極楽、悪いことをすれば地獄、そのような型にはまった考え方が知らない内に身につけているのかも知れません。もともと、亡くなる後のことまで話が進むことは少ない。人生を振り返って良かった事を確認していくことで終わることが多いです。現代人は亡くなる後のことについてまで考えが及ぶことは少ない。その理由は死後のことを考えると怖くなるから、でしょうか。聖書の律法や罪のことを知らなくても、律法によつては罪の自覚が生じない(ローマ三・二〇)のと同じなのでしょう。まともに考えると裁きしか予想できなくなる訳です。死ぬときには、身体的苦しみも怖いですが、まともに考えると裁きも怖い。死ぬのが怖い、という叫びはもつともです。思いますに、死の怖さを誤魔化す事の出来なかった人の方が、神様に救いを求めているのでは？

そして幸いなことに、ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によつて立証されて(口語訳では「証しされて」と訳出)、神の義が示されました。律法とは関係なくというのは、自分が善い行いが出来たかどうかに関係なくということです。律法と預言者によつて立証されてというのは、人間は自力で自分を救えない、だから救い主に救って戴くしかないという願望を立証しているという事です。でも、神の義が示されました！

通常、正しさ、正義を前にしては、人は裁かれるしかありません。でも、神の義が示されたら、どうなるのでしょうか。示されるというのは、内側から外側へと示される、現されることです。神

様は愛です。その愛が外側に現れて示される神の義は、通常の正義とは何か異なるものです。赦しが伴う。それなら、神の愛が示された、と言えば良さそうなのですが、神の義です。神の愛は、赦しを伴います。

でも、彼らが立ち帰ることを拒んだ。我が民は頑なに私に背いている。故に滅ぼす(ホセア一・五〜七参照)。赦しとは、悪いことをしても何でも赦してあげるよ、というような甘やかしではありません。良くない事は良くない。いけないものはいけない。そこから反省して立ち直っていくことを求めます。反省も立ち直りもないなら、せめて在るがままの所から神様に心を向ける立ち帰る、その立ち帰りもないなら裁かれるしかない。そして律法と預言者たちが証したのは、立ち帰りもない人間の姿、自分では救うことの出来ない人間の姿です。だから旧約の歴史の事実として北王国イスラエルは、神様がアッシリアを用いて滅ぼされたのでした。

そこで、神の愛が外に示され現れてくる神の義は、その裁きを救い主キリストが代わりに負った罪と何の関わりのない方を、神は私たちのために罪となさった(Ⅱコリント五・一二)。愛であるキリストを罪となさった。十字架の出来事です。こうして神の愛が、キリストを罪となさる十字架の出来事に、神の義として示された、現されました。そこには罪とされたキリストに、甘やかしはない。罪に対する正義を貫徹しつつ、私たちへの愛が溢れている。それが神の義です。キリストは自分は

何も悪いことをしていないのに、十字架の裁きを受けることを、良しとされました。ここに私たちに對するキリストの愛があるし、救い主としての真実がある。神が神であられる。救い主が救い主である姿が示されたのでした。

さて、イエス・キリストを信じることににより、信じる者すべてに与えられる神の義です（ローマ三・二二）とあります。聖書教会共同訳では、神の義は、イエス・キリストの真実によって、信じる者すべてに現されたのです、と訳しています。キリストを信じることににより、という私たちの側の信仰を語らずに、キリストの側の真実を語っています。そのキリストの側、私たちの外で起こった十字架の出来事は、キリストの真実に依ります。それを、教会の宣教を通して受けとめるようにと、神の義が与えられます。十字架に示された神の義が与えられており、私たちはそれを信じます。私たちの側の信仰の有る無しによって、神の義が与えられたりしなかったりするものではありません。神の義はキリストの真実によって、その恵みによって全ての人に与えら、救いをもたらします。それを私たちは信仰を通して受けとめます。

終わりに、以前も紹介しましたが、証し集のあとがきがこう締めくくられていました。この証し集を読むことで、少しでも皆様の生活の一部に、イエス様を心において過ごしてきた先達の方の思いが、染み込むといいなと思います。染み込んできた信仰の思いが、外に現れて信仰によって生き

る生き方が、私たちの証しとなります。神の愛が十字架に現れて信仰の義が示されたように、私たちの信仰も、信仰によって生きる証しとなって、私たちのこの社会での生活になります。それは救われるための善い行いではなく、救われた信仰者の証しなのです。私たちは、私たちの外側にある、十字架を担われたキリストの真実によって救われ、与えられた神の義を信仰を通して私たちの心の内側へと受けとめ、そして信仰によって生きる。それは外側に示されていく証しとなっていきます。